

2014年4月25日

各位

## 積水ハウス株式会社

代表取締役社長：阿部 俊則

本社：大阪市北区大淀中1-1-88

### ～ダイアログ・イン・ザ・ダーク(DID)の暗闇空間を活用～ UDにも配慮した「しめ忘れお知らせキーⅡ」を開発

積水ハウス株式会社は、情報発信・研究開発拠点「住ムフムラボ」(グランフロント大阪 北館4階)にあるダイアログ・イン・ザ・ダーク(DID)「対話のある家」の暗闇空間を利用し、一般の方や視覚障がいのあるDIDのアテンド(案内スタッフ)に試作品を使用、比較してもらうことで、施錠・解錠の状態がキーを「見て」「さわって」わかる「しめ忘れお知らせキーⅡ」を株式会社オプナスと共同開発、2014年1月より発売を開始し、戸建商品のシリンダーキーに標準採用いたしました。

戸建て住宅の侵入盗被害のうち、実に4割以上が「カギしめ忘れ(無締まり)」によるものです。

外出する際、鍵の施錠の確認に戻ったり、記憶が曖昧となることで一日中不安に過ごした経験のあるひとが少なくないという研究データなどに基づき、2009年10月より、施錠・解錠の状態が「見て」わかる「しめ忘れお知らせキー」を採用しました。

また、当社が推進するスマートUDの視点から、視覚障がい者の方だけでなく一般の方も便利に扱えるように、また、どんなに堅牢な防犯設備も施錠を忘れてしまったり、記憶が曖昧であっては不安を排除できないという考えのもと、ポケットやカバンの中に入れていても取出さずに「さわる」だけで、カギの施錠の有無がスムーズに確認できるように「さわって」わかる機能を追加しました。

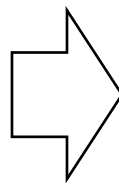
「さわるだけで確認できる」「さわり心地の良さ」の実現のために、一般の生活者である「住ムフム研究メンバー」や、視覚障がいのあるDIDのアテンドと研究開発のワークショップを「住ムフムラボ」の「共創」として実施し、使用する側の視点を反映したカギの開発が可能となりました。

「しめ忘れお知らせキー」



＜「見ればわかる」～色による認識＞

「見ればわかる」に  
「さわってもわかる」  
機能を追加



「しめ忘れお知らせキーⅡ」



鍵をあげると突起が引っ込み「オレンジ」の表示が消える。

＜「見て」、「さわってわかる」～色と形状による認識＞

電気錠の普及や生体認証などの技術を利用するだけでなく、相対的にコストパフォーマンスの高い一般的なシリンダーキーに於いても「しめ忘れお知らせキーⅡ」を標準採用することで、積水ハウスの戸建住宅全体の防犯性能と利便性の向上を実現しました。こうした「スマートユニバーサルデザイン」の普及と推進を一層加速させます。今後も、先進の技術で快適な暮らしを実現するブランドビジョン「SLOW & SMART」に基づき、「快適防犯」の住まいを提案してまいります。

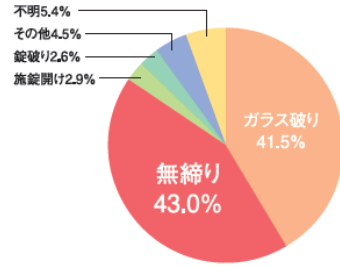
## ●施錠についての研究データ

住宅の玄関の鍵に関する防犯面での実態、住まい手の不安要因は、「鍵のしめ忘れ」が大きなものとなっています。

### ◇鍵の無締りによる被害は4割を超える

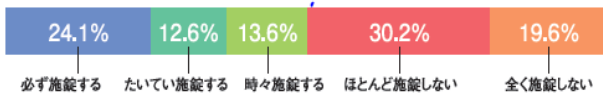
平成22年の警察庁データでは、戸建て住宅の侵入盗被害のうち「約43%」が窓や玄関ドアの「カギしめ忘れ(無締まり)」によるものでした。

■戸建住宅における侵入手口(全国)



出典：警察庁HPより作成(平成22年)

### ◇ちょっとした外出時に施錠をする頻度



出典：積水ハウス㈱ 生活者意識調査 平成21年

ちょっとした外出時に「全く施錠しない」「ほとんど施錠しない」人が約半数もいます。

### ◇過去1年間で外出後に玄関ドアの施錠をしたか不安になった回数



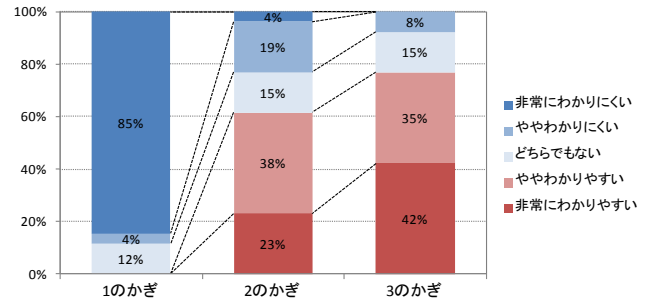
出典：積水ハウス㈱ 生活者意識調査 平成21年

施錠をしたか不安になったことがある人は半数以上を占め、過去1年間で「3回以上」不安になったことがある人は、16%いました。

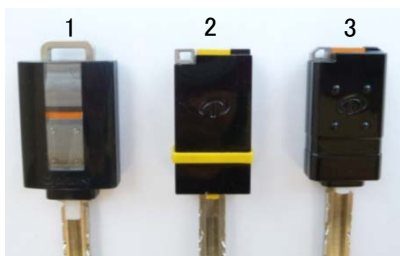
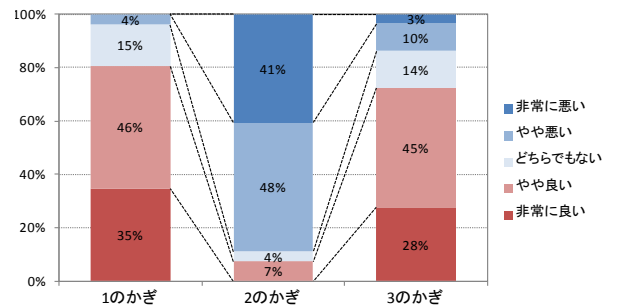
## ●「住ムフムラボ」のダイアログ・イン・ザ・ダーク(DID)での検証

当社「住ムフムラボ」のDIDの暗闇空間に、「住ムフム」研究メンバーから募集した被験者30名に参加いただき、試作品のカギの評価を行う最終検証をしています。「鍵を掛けたかどうか分かりやすいか」「鍵を触った際のさわり心地はよいか」について、グループ対話形式で評価し最終商品を決定しています。また、視覚障害のあるDIDのアテンド(14名)にも同様の評価をしてもらい好評価を得ています。

### 【鍵を掛けたかどうか分かりやすいか？】



### 【鍵を触った際のさわり心地はよいか？】



従来品 試作1 試作2

商品化への最終設計段階において「分かりやすさ」「さわり心地」ともに、もっとも良い評価を得ることができ、商品化へと進めています。